

〔研究ノート〕

男子の家事遂行と父親・母親との関係満足

森 中 典 子

要 旨

本研究の目的は、男子の家事遂行が、父親および母親との関係満足へどのような影響を与えるのかを明らかにすることである。分析対象は、首都圏に在住する9歳から18歳以下の男子216名とその父親・母親である。分析の結果、男子が家事を積極的に行うほど、父親および母親との関係満足度が高まることがわかった。さらに、4歳以下のきょうだいがいるなど、家事労働への家庭内需要が高い場合や、父親との会話頻度が多いほど、男子は家事を積極的に行うことが明らかになった。本研究の結果から、男子が家族の一員として家の仕事を行うことによって、親子の意思疎通が図られ、より良い親子関係へ発展していく可能性が示唆された。

1. 研究背景と目的

近年、共働き世帯の増加に伴って、男性の家事参加に対する社会的期待はより一層高まりをみせているが、男性が積極的に家事を担うためには、子どもの頃から家事を行い、家庭内におけるジェンダー平等な役割分担の重要性を理解する必要があるだろう。しかしながら、『第1回子ども生活実態基本調査報告書』（ベネッセ2005）によると、家の手伝いを普段から行う男子の割合は、小学生・中学生・高校生いずれの場合も女子を下回っており、子どもの頃から家事におけるジェンダー差が見受けられるのが現状である。加えて、男子の家事遂行に関する既存研究は少なく、それが男子にどのような影響を及ぼすのかを示唆した研究はごくわずかである。

そこで本研究では、9歳から18歳以下の男子とその両親を対象として、男子の家事遂行が、父親や母親との関係満足へどのような影響を与えるのかを明らかにすることを目的とする。当

該年齢層を分析対象とした理由は、衣食住に関する様々な概念の認識や技能が発達するのは概ね9歳からであることを踏まえて（村山・中村1981a：村山・中村1981b）、家事を自立的に行うことが可能であると考えたためである。

2. 先行研究と概念モデルの提示

(1) 男子と親子関係

子どもは児童期後期から、心理的依存の対象を両親から友人へと移行するが（國枝・古橋2006）、親子関係はその根底において継続するため、子どもにとって重要な意味を持つと考えられる（小高1998）。特に思春期を迎えた男子の親子関係において、父親の影響が大きく、男子は父親との間に趣味や将来の話など共通の話題を持ち始め、同性との会話を求める傾向が出てくる（岡田2003）。例えば、小学生の男子は、父親や母親と頻繁に会話をしているほど家庭生活に満足しているが、中学生になると、父親と

の会話頻度のみが男子の家庭生活への満足度に影響を及ぼすことが確認されている（大山 2001）。さらに、父親との共食頻度が多いほど、高校生男子の父親に対する愛情・理解・信頼の認知が高いことがわかっている（平井・岡本 2003）。以上のように、親子関係と親子の意思疎通、家族の共食に関する研究の蓄積は多いが、男子が家族の一員として家事を担うことにより、父親や母親との関係性にどのような影響を及ぼすのか検討した研究はこれまで行われていない。

(2) 男子の家事遂行

幼いきょうだいがいるなど家事労働への家庭内需要が高い場合や母親のフルタイムで就業している場合は、男子は積極的に家事を行うことがわかっている（Evertsson 2006）。また、父親が性別による役割分業に対して肯定的であると、男子の家事頻度が減少するが（Blair 1992）、母親が否定的である場合は、男子は頻繁に家事を行う（Cunningham 2001）。そして学歴の高い母親は、男子に家事をするように働きかけることがわかっている（Cordero & Esping 2018）。さらに男子の家事遂行は同性である父親の家事遂行と正の関連を持つことが確認されており（Evertsson 2006）、蟹江（2004）

は、女子と比べて男子の方が父親の家事遂行の影響をより強く受けていると報告している。そして、親子の会話やレジャー、夕食や朝食を一緒に食べるというよう家族の共同行動が、男子の家事遂行にポジティブな影響を及ぼすことが確認されている。例えば、三輪（2000）は、家の仕事をよく手伝う男子は、父親と母親の双方とよく会話をしていると指摘している。また、母親の養育態度と子どもの家事遂行について検討した品田（2004）は、母親との会話頻度が多いほど、男子は積極的に家事を行うという結果を示している。以上に挙げた、男子の家事遂行を規定する要因はそれぞれ個別に検討されてきたが、これらを包括的に実証した研究はまだ少ないのが現状である。

(3) 本研究の概念モデル

以上の先行研究を踏まえ、図1にて本研究の概念モデルを提示する。本研究では、父親および母親との関係満足度を最終従属変数とし、男子の家事遂行度を媒介変数と位置付けて、その直接的な影響を検討するだけでなく、父親の家事分担割合、父親あるいは母親との休日のレジャー頻度および会話頻度、家族全員で朝食や夕食を食べる回数の影響についても検討する。

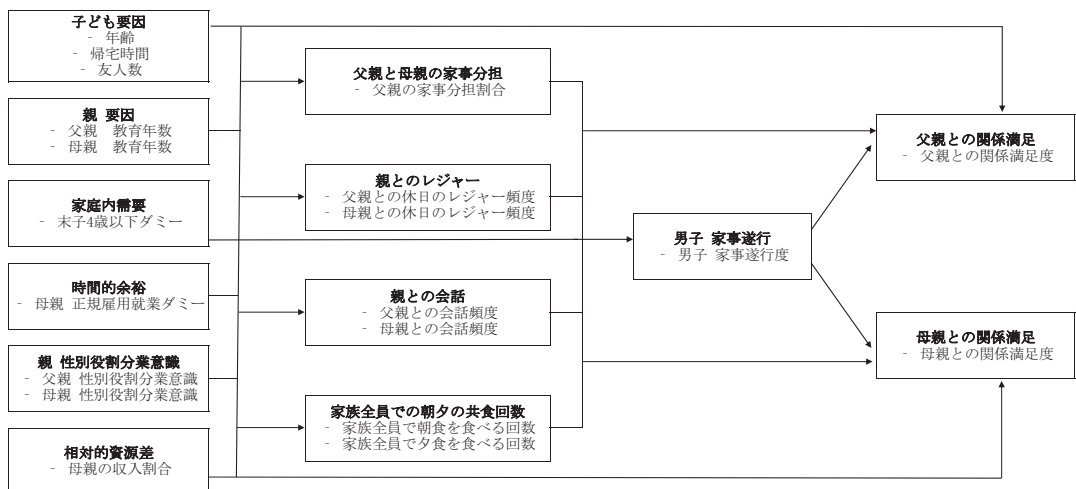


図 1. 本研究の概念モデル

独立変数である男子の年齢、帰宅時間、友人数、父親・母親の教育年数、末子4歳以下ダミー、母親 正規雇用就業ダミー、父親・母親の性別役割分業意識、母親の収入割合は、これらの要因を規定し、同時に男子の家事遂行度や父親および母親との関係満足度に直接的に影響を及ぼすと考える。

先行研究から予想される主な結果として、男子の家事遂行度が高いほど、父親や母親との関係満足度が高くなると考える。また、父親・母親との休日のレジャー頻度や会話頻度、家族全員で朝食や夕食を食べる回数が多いほど、父親および母親との関係満足度が高まると想定している。そして父親の家事分担割合が大きいほど、あるいは、父親・母親との休日のレジャー頻度や会話頻度、家族全員で朝食や夕食を食べる回数が多いほど、男子の家事遂行度が高まると予想している。

3. 方法

(1) データ

本研究では、公益財団法人 家計経済研究所が2008年に実施した「現代核家族調査, 2008」を用いて二次分析を行った。本調査の対象者は、首都30km圏内に在住で、年齢が35～49歳の

有配偶女性と同居する夫、そして子どもがいる場合には、小学4年生から18歳の長子1名を対象子としており、層化二段無作為抽出により対象者を抽出している。有効回答数は、1020世帯(26.3%)である。本研究での分析対象は、9歳から18歳以下の男子216名とその父親および母親である。

(2) 対象者の属性

表1に本研究における分析対象者の属性を示す。分析対象者の平均年齢は13.54歳であり、就学状況は小学生64人、中学生71人、高校生78人であった。そして両親の平均年齢は父親44.54歳、母親42.48歳である。両親の就業状況について、非正規雇用で就業する母親の割合は51.9%であるのに対して、正規就業の母親が占める割合は7.0%である。また、無業の母親が占める割合は、28.0%であった。他方、78.3%の父親が正規就業に就いており、自営業他の占める割合は20.8%であった。世帯年収は、833.84万円である。「平成20年国民生活基礎調査」(厚生労働省2008)における、末子の年齢階級別にみた児童のいる一世帯当たりの平均所得金額(末子年齢12～14歳)は720.7万円であり、これと比較すると、本研究の分析対象は、

表 1. 分析対象者の属性

	父親	母親
年齢	44.54歳	42.48歳
学歴		
	中学校	6.5%
	高等学校	33.8%
	短大・高専	5.1%
	大学・大学院	54.6%
世帯収入	833.84万円	
就業状況		
	働いていない	0%
	正規就業	78.3%
	非正規就業	0.9%
	自営業他	20.8%
男子 年齢	13.54歳	
就学状況		
	小学校	29.6%(n=64)
	中学校	32.9%(n=71)
	高等学校	36.1%(n=78)
	その他	1.4%(n=3)

集計は、非該当・無回答を除いた平均値あるいは%で示す。

高収入層に偏ったサンプルといえよう。そして最終学歴が大学・大学院卒の父親の割合は54.6%、母親の割合は20.4%であった。「平成22年国勢調査」（総務省2010）における大学・大学院卒の割合は、男性28.7%、女性11.9%であることから、分析対象の両親の最終学歴の分布は、高いほうに偏っている。

以上のように、対象者の両親が高収入、高学歴であることを踏まえると、本研究の分析対象は、首都圏に在住する高い社会階層に位置する家族であることから、本研究の分析結果の一般化は難しい。

(3) 使用変数

年齢：子ども票における回答値を用いた。帰宅時間：学校、塾、遊びなどから帰宅する時刻について、「1. 正午より前」は11、「14. 午後12時頃、12時以降」を24とし、その他は各時刻に置き換えた。友人数：同じ学校の同学年や別学年、別の学校に通っている友人の人数の合算値を用いた。父親・母親教育年数：父親および母親票で回答を得た最終学歴を教育年数に置き換えた。末子4歳以下ダミー：末子の年齢について、「4歳以下」を1とし、「5歳以上」を0とした。母親正規雇用就業ダミー：母親票にて「公務員」「民間の企業・団体の正規職員」として回答を得たものを1とし、その他を0とした。父親・母親性別役割分業意識：「夫は家族のために収入を得る責任をもつべきだ」「妻は家族のために家事や育児をする責任をもつべきだ」という2項目を用いて、得点が高いほど、性別役割分業に対して否定的となるようにそのままの値を用いて合成変数を作成し、項目数2で割った。なお、2項目の相関係数は、父親 $r=.488^{***}$ 、母親 $r=.522^{***}$ であった。母親収入割合：父親票および母親票から得られた昨年1年間の収入について、父親と母親の収入の合算値に占める母親の収入割合を算出した。父親の家事分担割合：「料理」「食事の後片づけ」「掃除」「洗濯」の4項目を週当たりの遂行度に置き換えた。なお、父親の家事遂行度は、父親自身が回答し

た家事遂行度と母親が回答した父親の家事遂行度の平均値を用いて、父親と母親の家事遂行度の合算値における父親の家事遂行度の占める割合とした。父親・母親との休日のレジャー頻度：休日における父親・母親との旅行やドライブのほか、スポーツやゲーム、映画・ビデオ鑑賞などの頻度について月当たりの頻度に置き換えた。父親・母親との会話頻度：子ども票において「1. よく話す」から「6. まったく話さない」の6件法を用いてたずねられており、得点が高いほど父親・母親と会話する頻度が多いとなるように、値を反転させて用いた。家族全員で朝食・夕食を食べる回数：一週間における家族全員で朝食・夕食をとった回数に対する母親の回答値を用いた。男子家事遂行度：父親の家事分担割合と同様に、子ども票にて回答が得られた家事4項目について、週当たりの遂行度に置き換えて加算したものを項目数4で割った。父親・母親との関係満足度：父親・母親との関係満足について、子ども票にて「1. 満足」から「6. わからない」の6件法でたずねられており、得点が高いほど、父親や母親との関係満足度が高いとなるように、値を反転させて用いた。なお、男子家事遂行度と父親家事遂行度の分布には偏りがあったため、平方根変換を行い、新たに作成した変数を分析に用いた。

(4) 分析方法

本研究では、男子の家事遂行が父親や母親との関係満足へどのような影響を及ぼすのか検討するために、媒介変数を取り入れた分析が可能なパス解析を行う。なお、分析に使用したソフトは、SPSS Ver.25.0とAMOS 25.0である。

4. 結果

(1) 記述統計

表2に記述統計を示す。まず、分析対象の平均的な帰宅時間は18時30分であり、平均的な友人数は34.80人である。4歳以下の末子がいる割合は7%であった。そして両親の性別役割

表 2. 記述統計

		<i>n</i>	平均値	標準偏差	範囲	
年齢	(歳)	216	13.54	2.61	9.00	18.00
帰宅時間	(時)	216	18.50	1.74	15.00	24.00
友人数		216	34.80	34.78	0.00	250.00
父親 教育年数		216	14.19	2.39	9.00	18.00
母親 教育年数		216	13.27	1.75	9.00	18.00
末子 4歳以下ゲーム		216	0.07	0.26	0.00	1.00
母親 正規雇用就業ゲーム		216	0.07	0.25	0.00	1.00
父親 性別役割分業意識		216	1.62	0.52	1.00	3.00
母親 性別役割分業意識		216	1.61	0.55	1.00	4.00
母親 収入割合		216	0.13	0.13	0.00	0.79
父親 家事分担割合		216	0.09	0.11	0.00	0.50
父親との休日のレジャー頻度		216	1.13	1.43	0.00	4.00
母親との休日のレジャー頻度		216	1.05	1.40	0.00	4.00
父親との会話頻度		216	4.57	1.11	1.00	6.00
母親との会話頻度		216	5.33	0.86	3.00	6.00
家族全員で朝食を食べる回数		216	3.12	2.23	0.00	7.00
家族全員で夕食を食べる回数		216	2.93	2.03	0.00	7.00
男子 家事遂行度		216	0.88	0.59	0.00	2.65
父親との関係満足度		216	4.27	0.86	1.00	5.00
母親との関係満足度		216	4.44	0.74	1.00	5.00

分業意識の平均値は、父親 1.62、母親 1.61 であることから、分析対象の両親は性別役割分業に対して概ね肯定的であることがうかがえる。母親の収入割合は 13% であり、両親の相対的資源差における父親の収入の占める割合はかなり高い。また、父親の家事分担割合が平均 9% であることから、家事の大半を母親が行っていることがわかる。一月当たりにおける両親との休日のレジャー頻度は、父親は 1.13 回であるのに対し、母親は 1.05 回であった。さらに父親との会話頻度における平均的回答は「まあ話す」であるのに対して、母親との会話頻度は「話す」であることから、分析対象は父親よりも母親と会話をする頻度が多いことがわかる。一週間における家族全員で食事をする平均的回数は、朝食 3.12 回、夕食 2.93 回である。そして、父親および母親との関係満足度についての回答の平均値は、いずれも「まあ満足」から「満足」の間にあることから、分析対象は父親や母親との関係に概ね満足している。

(2) 各変数の相関係数

表 3 に、分析に用いた各変数の相関を示す。男子の家事遂行度が高く、父親および母親との休日のレジャー頻度が多く、父親との会話頻度が多いと、父親との関係満足度が高いことが示された。

他方、男子の家事遂行度が高く、父親・母親との休日のレジャー頻度や会話頻度が多いと、母親との関係満足度は高いものの、男子の年齢が高く、帰宅時間が遅く、母親の収入割合が多いと、母親との関係満足度が低いことが示された。そして、父親および母親との会話頻度が多いと男子の家事遂行度は高いが、男子の年齢が高いと家事遂行度が低いことが示された。

(3) パス解析

本研究の分析結果を図 2 に示す。分析で使用したモデルの適合度は、GFI=.962、AGFI=.828、RMSEA=.065 であった。RMSEA がやや高いものの、GFI 値が 0.9 以上あることを踏まえて、モデルの適合度は概ね良好であると判断した。

表 3. 分析に用いた各変数の相関

変数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	
1 年齢	—																		
2 帰宅時間	.319**	—																	
3 友人数	.006	.152*	—																
4 父親 教育年数	-.186**	-.069	-.052	—															
5 母親 教育年数	-.081	.022	.075	.392**	—														
6 父親 性別役割分業意識	-.108	-.124	-.122	.226**	.171*	—													
7 母親 性別役割分業意識	-.108	-.037	.010	.151*	.169*	.154*	—												
8 母親 収入割合	.093	.057	-.025	-.241**	.089	.089	.273**	—											
9 父親 家事分担割合	-.061	.045	-.089	-.028	.063	.111	.093	-.043	—										
10 父親との休日のレジャー頻度	-.495**	-.147*	-.007	.163*	.101	.111	.093	-.043	.110	—									
11 母親との休日のレジャー頻度	-.484**	-.195**	.024	.182**	.104	.073	.056	-.123	.008	.754**	—								
12 父親との会話頻度	-.212**	.108	.120	.003	.042	.017	.047	.032	.179**	.291**	.179**	—							
13 母親との会話頻度	-.260**	.026	.033	.057	.040	-.023	-.079	-.107	-.023	.209**	.219**	.434**	—						
14 家族全員で朝食を食べる回数	-.123	-.046	.110	-.217**	-.030	-.099	.063	.115	.040	-.049	-.068	.144*	.040	—					
15 家族全員で夕食を食べる回数	-.088	.033	.014	-.216**	-.097	.030	.105	.144*	.117	-.103	-.126	.209**	.110	.646**	—				
16 男子 家事遂行度	-.184**	-.095	.027	.011	.109	-.021	-.012	.072	.081	.089	.102	.164*	.149*	-.079	-.047	—			
17 父親との関係満足度	-.053	-.025	.047	.081	.014	.039	.041	-.084	.015	.196**	.151*	.324**	.045	-.015	-.054	.202**	—		
18 母親との関係満足度	-.214**	-.149*	.081	.109	.019	.021	.006	-.161*	-.029	.180**	.222**	.173*	.301**	-.124	-.108	.250**	.599**	—	

n=216 ***p<.001, **p<.01, *p<.05

まず、男子の家事遂行度は、父親との関係満足度 (.169) および母親との関係満足度 (.170) に正の影響を及ぼしていた。このことから、男子が頻繁に家事を行うほど、父親および母親との関係に満足することがわかった。さらに、父親との会話頻度が多いほど (.277)、父親との休日のレジャー頻度が多いほど (.157)、年齢が高いほど (.151)、男子は父親との関係に満足するという結果が得られた。他方、母親との関係満足度に正の影響を及ぼしていたのは、母親との会話頻度 (.316) であった。また、家族全員で朝食および夕食を食べる回数と父親・母親との関係満足度の間に有意なパスは確認されなかった。そして、男子の家事遂行度を促す要因は、末子 4 歳以下ダミー (.140) と父親との会話頻度 (.135) であった。このことから、4 歳以下のきょうだいがいると、父親とよく話をするほど、男子は頻繁に家事を行うことが明らかになった。また、父親の家事分担割合や父親・母親との休日のレジャー頻度、家族全員で朝食や夕食を食べる回数と男子の家事遂行度の間に有意な関係性はみられなかった。

5. 考察

本研究では、9 歳から 18 歳以下の男子とその父親・母親を対象に、男子の家事遂行が父親・母親との関係満足にどのような影響を与えるのか、パス解析によって検討した。その結果、男子が家事を積極的に行うほど、父親および母親

との関係に満足することがわかった。子どもの家事遂行は、親子のコミュニケーションを円滑にするという三輪 (2000) の指摘を踏まえると、男子が家事を通して母親や父親と積極的に関わろうとすることによって、親子の意思疎通が図られ、より良い関係性へと導かれていくことが推察される。

また、家事労働に対する家庭内需要のほかに、父親と頻繁に会話をするほど、男子は家事を積極的に行うことが明らかになった。表 3 における父親の家事分担割合と父親との会話頻度は正の相関関係にあり、家事を積極的に行う父親は男子とよく話をしていることが示された。このことから、父子の会話の中で家庭生活や家事について父親が話しており、それが男子の家事遂行を促していることが推察される。さらに、母親の収入割合や友人数は男子の家事遂行と関連がないという結果から、母親の就業や男子の友人関係が男子の家事遂行に影響を及ぼさないことが確認された。そして、母親の教育年数や性別役割分業意識について、学歴の高い既婚女性は、性別による役割分業に対して否定的な傾向であることから (原・肥和野 1990)、男子に対して家事を行うように働きかけると予想していたが、異なる結果となった。このことから、“男は仕事、女は家庭”という考え方に代表されるような性別役割分業を捉える意識に関係なく、母親は男子に対して家事を行うように働きかけていないことが明らかになった。加えて、家族の共食においても男子の家事遂行と有意な関連

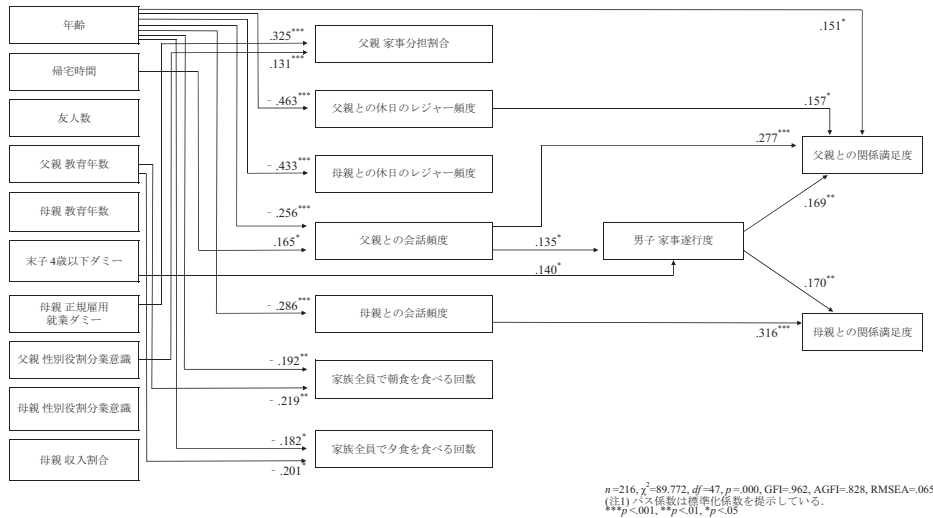


図 2. 父親・母親との関係満足度を最終従属変数としたパス解析図

性を示していないことから、家族全員で食事をすることは、男子の家事遂行に影響を及ぼさないことがわかった。本研究を通じて、男子の家事遂行の促進するにあたって、父親との意思疎通性が重要であり、男子が家事を積極的に行うことによって父親や母親との関係性が高まることが示された。

最後に本研究の限界点は、以下の三点である。第一に、本研究で使用したデータは、社会的に高階層の核家族を調査対象としているため、分析結果の一般化が困難である。第二に、小学生・中学生・高校生の各サンプル数が少ないことから、男子の発達段階に応じた分析が困難であり、今後の課題として残された。第三に、本研究では一時点における調査データを使用したため、時間の先行性を確定することが難しい（岡村 2017）。例えば、親との関係性が良好であるほど、男子の家事遂行が高まるという、本分析とは逆の因果関係も考えられる。しかしながら、男子の家事遂行が親子の関係性に正の影響を及ぼすことを示した本研究によって、家族の一員として男子が家の仕事を行うことにより、親子の関わり合いを通じて、親子関係をより良いものへと発展させる可能性があることが示唆された。今後は、子どもの年齢差に着目し、子どもの家

事遂行について検討を重ねるとともに、生活的・精神的自立への影響について質的および量的研究を通して取り組んでいくことを課題とした。

謝辞

二次分析にあたり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター SSJ データアーカイブから「現代核家族調査,2008」(公益財団法人家計経済研究所)の個票データの提供を受けました。記して感謝申し上げます。

引用文献

ベネッセ教育研究所, 2005, 『第1回子ども生活実態基本調査報告書』。
 Blair, S. L., 1992, The Sex-Typing of Children's Household Labor: Parental Influence on Daughters' and Sons' Housework. *Youth and Society*. Vol.24, No.2, 178-203.
 Cordero-Coma, J., Esping-Andersen, G., 2018, The Intergenerational Transmission of Gender Roles: Children's Contribution to Housework in Germany. *Journal of Marriage and Family*. Vol.80, No.4, 1005-1019.
 Cunningham, M., 2001, Parental Influences on the Gendered Division of Housework. *American Socio-*

- logical Review*. Vol.66, No.2, 184-203.
- Evertsson, M., 2006, The reproduction of gender: housework and attitudes towards gender equality in the home among Swedish boys and girls. *The British Journal of Sociology*. Vol.57, No.3,415-436.
- 原純輔・肥和野佳子, 1990, 「性別役割意識と主婦の地位評価」岡本英雄, 直井道子編. 『現代日本の階層構造 4 女性と社会階層』東京大学出版会, 165-186.
- 平井滋野・岡本祐子, 2003, 「食事場面の会話と親子の心理的結合の関連」『青年心理学研究』, Vol.15, 33-49.
- 小高恵, 1998, 「青年期後期における青年の親への態度・行動についての因子分析的研究」『教育心理学研究』, Vol.46, 333-342.
- 蟹江教子, 2004, 「児童・生徒の家事参加の状況および父親の家事参加との関連についての検討」『日本家庭科教育学会大会・例会・セミナー研究発表要旨集』.
- 厚生労働省, 2008, 「平成 20 年国民生活基礎調査」<https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0003131417>. (閲覧日: 2019.1.23)
- 國枝幹子・古橋啓介, 2006, 「児童期における友人関係の発達」『福岡県立大学人間社会学部紀要』, Vol.15, 105-118.
- 三輪聖子, 2000, 「子どもからみた親との関係——子どもの手伝いをめぐる親子関係を中心に——」神原文子, 高田洋子編. 『教育期の子育てと親子関係——親と子の関わりを新たな観点から実証する——』ミネルヴァ書房, 102-116.
- 村山淑子・中村よし子, 1981, 「家庭生活に関する児童・生徒の能力の発達(第1報)——児童の知識・理解——」『日本家庭科教育学会誌』, Vol.24, No.1, 16-21.
- 村山淑子・中村よし子, 1981, 「家庭生活に関する児童・生徒の能力の発達(第2報)——児童の技能——」『日本家庭科教育学会誌』, Vol.24, No.1, 22-28.
- 岡田みゆき, 2003, 「中学生における食事の親子の会話の実態——親子の会話における小学生から中学生の変化——」『日本家政学会誌』, Vol.54, No.1, 3-15.
- 大山七穂, 2001, 「親子関係と親の影響」『第2回青少年の生活と意識に関する基本調査報告書』.
<https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/seikatu/html/html/2-2-2.html> (閲覧日: 2019.1.23)
- 岡村利恵, 2017, 「未就学児を持つ母親のIT機器利用と生活充実感」『家族社会学研究』Vol.29, No.1, 7-18.
- 品田知美, 2004, 「子どもに家事をさせるということ——母親ともう1つの教育的態度——」本田由紀編. 『母親の就業と親子関係——母親たちの階層戦略——』勁草書房, 148-166.
- 総務省統計局, 2010, 「平成 22 年国勢調査」<https://www.stat.go.jp/data/kokusei/2010/users-g/wakatta.html#jump2>. (閲覧日: 2019.3.3)

Boys' Involvement in Housework and Relationship Satisfaction with Parents

Noriko Morinaka

Summary

The purpose of this study is to examine how boys' involvement in housework affects their relationship satisfaction with their parents. The subjects are 216 boys aged between 9 and 18 years, who live with their parents in Tokyo and the surrounding suburbs. This study conducted a path analysis with a theoretical basis and found that boys' involvement in household labor increased relationship satisfaction with their parents. Moreover, having sibling aged under 4 years and more frequent conversations with fathers encouraged boys' participation in housework. These findings suggest that in the process of participating in housework among boys, interaction with parents facilitates better parent-child relations.